【学校評価資料】

山手小学校

学校経営目標	具体的計画	令和2年度の達成基準	自己評価（中間）			自己評価（最終）			学校関係者評価
			達成状況	評価	改善策	達成状況	評価	改善策	
一　心プロジェクト （心豊かな児童の育成）	①「だれもが行きたくなる学校づくり」の実践や「特別な教科道徳」の授業を通して、思いやりの心や自己有用感を育成し、安心して学校生活を送れるようにする。 **〔心優しい子供〕** ②すきだ山手小学校運動を通して、礼儀正しい児童を育成する。 **〔礼儀正しい子供〕**	・相手を思いやった言動がみられるという回答が92%以上で、学校が楽しいという回答が90%以上である。（児童・保護者・教職員アンケート）	思いやり 児童　：　96% 保護者：　93% 教職員：　97% 楽しい 児童　：　93% 保護者：　92% 教職員：　98%	A	・校内なかよし週間に合わせて，人権標語，きらりカード，なかよしの輪（運営委員会）等の取組を行うとともに，道徳の授業で人権に関する内容を取り上げることで，児童の人権意識をより高めていく。 （なかよしの輪）	思いやり 児童　：　94% 保護者：　90% 教職員：　97% 楽しい 児童　：　91% 保護者：　93% 教職員：100%	A	・児童相互の関わりがより多くなり、友達との関係が濃くなる一方で、人間関係のトラブルも多くなってきた。校内なかよし週間に合わせた取組以外にも、学級で自分たちの使っている言葉について話し合うなどして、共通の目標や問題意識をもち、集団としての雰囲気をよりよいものにしていく。	「思いやりの心」については、学校生活を通して児童に育まれている。昨年度よりも達成基準を高く設定しているが、基準は達成されており一定の成果があったとして自己評価は妥当である。今後も「キラキラ言葉とチクチク言葉」、「良いとこ探し」といった具体的で児童がわかりやすい取組を通して、児童達の自己肯定感を育成し、心の安定をはかってもらいたい。「思いやり」は、本人と相手の目線では異なる捉え方があることを学校と家庭が連携して教えることも考えて欲しい。また、「学校が楽しい」の「楽しい／楽しくない」の内実が何かを把握することで、「楽しくない」と回答している児童へのケアができるのではないか。児童の「楽しい」が100%になるように目指して欲しい。他者から認められる経験を通して、自分も他者も認める力が高まる。教職員と保護者が一丸となって考え、児童達自身で解決する力を身につけるように促すことで、さらに人の気持ちを理解できるようになると期待する。
		・子どもが友達に優しくされているという回答が90%以上である。（保護者アンケート） ・友達に嫌なことを言われたり、嫌なことをされたりしていないという回答が80%以上である。（児童アンケート） ・学校はいじめの対応や個々の児童に対しての言葉がけなど、人権に配慮した内容で対応をしているという回答が80%以上である。（保護者アンケート）	優しい 保護者：　90% 人権 児童　：　81% 保護者：　77%	B	・「わからない」回答が14%で、昨年度より少なくなっている。引き続き、学校での人権に関する取組を学校便りや学年通信で発信していく。	優しい 保護者：　92% 人権 児童　：　87% 保護者：　78%	B	・アンケートの結果は、児童・保護者ともに高くなっている。思いやりのある言動を認め、称揚することで、当たり前のよさも意識できるようにしていく。また、学校での人権に関する取組を家庭へ発信していくことも、意識的に継続する必要がある。 ・今年度は分散参観日で回数も少なかったが、人権参観日で道徳科（人権）の授業を積極的に行い、懇談等でも話題にできるようにする。 ・保護者のわからないという回答が中間期と同じだったので、放送を利用して児童から保護者に伝わる工夫をしたり、参観日での掲示物の工夫をさらに図ったりすることで、保護者に伝わるようにしていく。	「友達が優しくしてくる」「人権に配慮」することは、児童にとっては安全で安心な学校生活を送る基礎となるので非常に重要な内容である。「友達が優しくしてくれる」という児童の回答が昨年度よりも上がっていることは、昨年度の結果の検証を教職員が真摯に行った成果であると思う。「人権に配慮した対応」について保護者の回答が上がったのは、「何が人権に配慮した対応なのか」といった点を教職員が保護者に発信した結果、理解度が上がったのではないだろうか。一方で、保護者は児童を通した情報によるところが多く、学校での取組を正しく掴み取れていない部分もあるので、教職員から保護者への発信を今後も引き続き行って欲しい。
		・挨拶や返事がよくできる、履き物をそろえる、黙って考えて掃除ができるという回答がそれぞれ80%以上である。（児童・保護者・教職員アンケート）	挨拶 児童　：　82% 保護者：　68% 教職員：　73% 履き物 児童　：　90% 保護者：　50% 教職員：　84% 掃除 児童　：　79% 保護者：　37% 教職員：　63%	C	・縦割り掃除が開始されるので、掃除の仕方の徹底や、黙って取り組む習慣付けを再度行っていく。その際に高学年のリーダー性を育てるようにしていく。 ・生徒指導の週目標（掃除や整理整頓について）も検討していく。 ・学校でできるようになってきたことが、家庭でも実施できるようにするために、啓発活動や、児童への家庭での働きかけを工夫していく。	挨拶 児童　：　86% 保護者：　68% 教職員：　74% 履き物 児童　：　87% 保護者：　44% 教職員：　97% 掃除 児童　：　92% 保護者：　33% 教職員：　92%	B	・新型コロナウイルスの影響で元気のよい挨拶はしにくい状況であるが、低学年でも会釈をする児童が多くなっている。履き物揃えについても生活目標や委員会の活動と併せて継続的に取り組んだ成果は見られている。縦割り掃除も軌道に乗り、高学年を中心に一生懸命取り組んでいる姿が見られている。 ・一方で保護者の評価は下がり続けていて、家庭ではできていないということが推測される。校内での児童の様子を発信し、家庭でも取り組む意識を少しでも高められるようにしていく。また、週目標を活用して、家庭でも進んで取り組むよう児童に声掛けをしていく。	「すきだ山手小学校」については、あいさつ、返事、履物、掃除等、生活習慣や人間関係に関する重要な事項が盛り込まれており、児童・教職員の回答では概ね基準が達成されている。各項目において、学校ではできていて、家では低い評価傾向にあるが、児童は「頑張ろう」という心が育っているので肯定的に捉えていいのではないか。学年差によるところもあるので、高学年が低学年の見本となる意識を持つ／縦割り班を今後も意識することが重要である。挨拶については、家庭・地域・学校で同様の挨拶ができるように、大人が児童に対して挨拶を率先して行うことを今後も続けていく必要がある。掃除や履物については、児童自身が家で行うといったことを学校で行うよりは意識していなかったり、「何を取り組めば掃除をしているのか」といった判断がしにくい面もあるかもしれない。「学校でも家でも」という意識の醸成を行って欲しい。 「心プロジェクト」では、行動面を基準として評価されがちだが、「心」という情緒や認知について、「なぜその行動するのか」という根本を児童に伝えようとする学校の姿勢を継続して行ってもらいたい。心の教育は、学校教育と家庭教育での習慣が大きく影響することを考慮すると、保護者の協力を得ながら、家庭や地域でのつながりを意識し、児童の様子を情報共有することも大切である。
二　学びプロジェクト （確かな学力の育成）	③岡山型学習指導のスタンダードや算数の授業づくりはじめの一歩を基に授業改善を図り、基礎的な力を身につけ、考えたことを筋道立てて表現できる児童の育成を目指して分かる授業を実践する。 ④どの子にも分かりやすいユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりを意識するとともに、個別に支援を要する児童について、共通理解の場を設け、全職員で全児童を支援できるようにする。また、学習課題の設定や家庭学習の内容・取り組む期間をそれぞれの児童の発達段階に応じて工夫していく。	・「『岡山型学習指導のスタンダード』や『算数の授業づくりはじめの一歩』を基にユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善に取り組んだ」「『めあて』『ふりかえり』を意識した授業を行った」という回答がそれぞれ90%以上である。（教職員アンケート）	スタンダード 教職員：　96% めあて 教職員：　100%	A	・『岡山型学習指導のスタンダード』や『算数の授業づくりはじめの一歩』を学年団で読み合い、授業の中で、意識しよう、大切にしようと思うことを確認し合う。2学期からの授業の中で実践していく。 ・授業のめあてを「～を考えよう」から脱却し、「～を考えて〇〇しよう」「～を調べよう」「～できるようになろう」など、児童が振り返りができるもの、教師が評価できるものに変えていく。	スタンダード 教職員：　96% めあて 教職員：　96%	A	・学年部、同学年で『岡山型学習指導のスタンダード』や『算数の授業づくりはじめの一歩』を確認しあったことは毎日の授業改善の実践に有効であった。そこで、学年部、同学年の授業の計画を立てる際に、資料をより一層活用していくことを継続していく。 ・授業の中の「めあて」や「ふりかえり」を意識して、研究授業や授業反省を行ったり、相互の授業参観の取組を行ったりしたことは、教職員の授業改善への意識を高めるために有効であったので、この取組を今後も継続していく。	全教職員で全児童をきめ細やかに支援する取組がなされているので、自己評価は妥当である。今後も個々の児童のニーズを意識して、児童理解に基づいた授業計画・実践・改善を行って欲しい。 「岡山型学習スタンダード」が定着していることは本校の取組の成果であるので、今後も継続してほしい。一方で、「スタンダード」の内容だけに留まるのではなく、発達段階や児童の状況に合わせた授業の工夫も今まで以上に積極的に行う時期にきている。個々の児童の理解度に合わせた取組の一つである「山手っ子タイム」は非常に良い取組なので今後も継続して欲しい。また、応用問題の時間の際、低学年の先生が高学年のクラスのサポートをすることで、児童1人1人への的確な指導ができている。 「学びプロジェクト」は、年々先生方の取組が良い方向へ向いているので、今後も期待したい。
		・「自分の考えを、順番を考えて話したり書いたりできるようになってきている」という回答が80%以上である。（児童アンケート） ・「自分の考えをもち、筋道立てて話したり書いたりすることができるようになっている」という回答が80%以上である。（教職員アンケート）	児童　：　81% 教職員：　65%	C	・授業中、自分の考えを発表したり、書いたりする(ミニ作文等)時間を意図的、計画的に設けるようにする。問題によっては、理由も一緒に書くよう指導していく。 ・中学年以上を中心に、文章で答える問題を宿題として計画的に出すようにする。1・2年生は週末に日記を出すようにする。 ・4、5、6年生は、山手っ子タイムで文章を書いたり、文章を読解して解いたりする問題に取り組む。	児童　：　88% 教職員：　93%	A	・ペアや班、小グループでの話し合い活動や自分の考えを書く活動を行ったことが効果が出ていると思われる。 ・中間期に示した改善策を継続的に実施することで、児童の達成状況も7%上昇した。今後も様々な学習・活動の中で話す活動・書く活動を取り入れる取組を増やして継続していく。	今年度から「筋道を立てて」という項目が入ることで、教員が児童へ指導をする際に「筋道」を意識できたのではないか。「読解力」や「求められていることを理解すること」は、国語ではもちろんのこと、今後の勉強全体に必要な力である。自分の考えを話すことができても、書くことが難しい面もあると思うので、保護者によるチェック等の仕組みを構築してもよいのではないか。また、児童の自己肯定感が高まると、安心して自身の思いや考えを伝えることができると思う。学校ではその基礎をつくってくれているので、今後も取組を続けて欲しい。
		・「家庭学習に（10×学年＋10）分以上取り組んでいる」という回答が80%以上である。（児童・保護者・教職員アンケート）	児童　：　80% 保護者：　68% 教職員：　82%	B	・平日は、音読、国語、算数の３点セットが基本となる。宿題をすることができるようになったら、学年の学習時間も意識するようにさせたい。家庭学習の目標時間座って学習することができるよう、自主学習に取り組む、自分でプリントを選んで持ち帰ってする、読書、低学年はぬり絵などを推奨していく。パソコンで調べ学習やタブレット学習、Eテレを見るなども学習時間とし、学習方法の範囲を広め、児童や保護者に周知していく。	児童　：　79% 保護者：　68% 教職員：　96%	B	・児童が家庭学習により取組やすくなるよう取り組んだことは一定の効果があった。今後は、現在の取組を継続していくとともに、メディアコントロール週間の取組や日々の声掛けを通して、児童が自分の家庭学習の時間を意識できるようにしていく。	今年度から、家庭学習の時間を学年によって変える／具体的な数字を記載するなどの取組の成果が出ている。家庭学習に自主勉強ノートを課すことで、児童の興味・やる気を引き出している。自主勉強ノートは、全児童一律でなく、個々に対応する取組となることも面白い。興味深い・他の児童の参考となる自主勉強ノートを公表することで、児童のやる気や自己肯定感の高まりにつながる。家庭の事情によっては難しい側面もあるかもしれないが、今後も児童の学びの意欲を高める取組を継続して欲しい。
		・国語科・算数科の単元テストにおいて、正答率が80%以上である。（教職員アンケート） ・学んだことがよく分かる。（児童アンケート）	教職員：　89% 児童　：　88%	A	・授業の後や単元テストの前に細かな振り返り・復習を行うよう努める。学習の定着状況をチェックし、不十分だと思われた部分については再度取り組む時間を確保する。 ・新しい問題に取り組むだけでなく、同じ問題にも繰り返し取り組むことで、各単元の学習内容の定着を図る。 ・現在の取組を継続するとともに、よりきめ細かな個別の指導を行い、正答率を上げていくことにつなげていく。	教職員：　92% 児童　：　93%	A	・細かな振り返りや復習を行ったことは効果が見られたので今後も取組を継続していく。学習の定着状況をチェックし、不十分だと思われた部分については再度取り組む時間を確保していくことも引き続き行っていく。特に、単元の学習終了後も同じ問題にも繰り返し取り組むことで学習内容の定着を図る活動を続ける。	新型コロナ禍により学校での学習が困難な状況下にあった今年にも関わらず、国語や算数の単元テストや基礎学力の向上が図られていることは教職員の努力の賜物である。児童への細やかな個別指導や繰り返し学習を通して、学習内容が定着していることは素晴らしい。今後も引き続き取り組んで欲しい。
		・「最後まであきらめずに問題を解決する力を育てるための工夫として、学習課題の設定や評価の仕方の工夫を行った」という回答が90%以上である。（教職員アンケート） また、「難しい問題でもあきらめずに考えた」という回答が80%以上である。（児童アンケート）	工夫 教職員：　92% あきらめない 児童：　87%	A	・より具体的なめあて・学習課題を設定することで、児童が見通しをもって学習・活動しやすいようにしていく。 ・学習や活動の中で、評価の具体的な基準を示すことを取り入れる。児童の自らの目標に向かって努力していく意識を育てる。 ・ノートなどに書いた自分の考えを大切にするように指導し、学習の経過を記録していく。児童の考えの変化や努力を教員や学習集団で認めていく。	工夫 教職員：　97% あきらめない 児童：　88%	A	・より具体的なめあて・学習課題を設定することで、児童が見通しをもって学習・活動しやすいようにしていく。 ・学習や活動の中で、評価の具体的な基準を示すことを取り入れる。児童の自らの目標に向かって努力していく意識を育てる。 ・ノートなどに書いた自分の考えを大切にするように指導し、学習の経過を記録していく。児童の考えの変化や努力を教員や学習集団で認めていく。 ・難しい問題をあきらめずに取り組むためにユニバーサルデザインの視点を取り入れ、ワークシート、ヒントカード、お手本（児童が目指すもの）を示すなど、さまざまな手立てを継続していきたい。	学習の中で自分の考えを大切にすることは、児童の理解を深めると同時に、児童が自身の考えを意識的にもつこととなる。たとえ回答が間違っていたとしても、頑張った経過を評価することは、児童の自信につながり、自己肯定感を高めることになる。「どこでつまずいてしまったのか」を認識することで、次の問題を解くことにつながる。苦手意識のある子どもに対して、引き続き個別対応を実践して欲しい。また、児童の意欲を向上させる掲示物、学習環境が整備・設定されていることも継続して欲しい。
三　元気プロジェクト （体力づくりと健康・安全教育の充実）	⑤休み時間や教科体育の時間にたくさん運動に取り組むことができるよう指導を工夫する。また、目標をもって運動に取り組むことができるような活動を積極的に行っていく。	・「体育の学習時間にたくさん運動している」という回答が90%以上である。（児童アンケート） ・「先生は児童が目標をもって運動に取り組むことができるよう工夫を行った。」という回答が80%以上である。（教職員アンケート）	児童　：　93% 教職員：　87%	A	・密や熱中症に気をつけながら、継続して取り組んでいく	児童　：　94% 教職員：100%	A	・現状の取組を継続していく。	コロナによる制約で体育等が難しいにも関わらず、児童が運動の取組ができているので、自己評価は妥当である。「目標をもって運動を取り組む」という点を追記したが、今年は難しい側面があったのではないか。状況を判断して目標値を設定し直すことも必要である。体育の時間の運動量が担任によって差があること等の運動力の二極化は、児童の身体の成長にも関わってくるので、運動への積極的な意識付けは行って欲しい。
		・「業間休みに外で活動している」という回答が85%以上である。（児童・教職員アンケート）	児童　：　79% 教職員：　98%	B	・コロナウィルスの影響で、外遊びを奨励しにくくなるために、「業間休みに外で活動している」という回答が75%以上であるに達成基準を変更して取組を実施する。（児童・教職員アンケート）	児童　：　78% 教職員：　94%	A	・コロナウイルス感染症拡大防止対応に照らして、中間期に達成基準を変えて、評価としてはAとなった。状況に応じた対応を今後検討していく。	休み時間や体育の時間にはしっかりと体を動かして欲しい。一方で、教室内で静かに過ごしたい児童もいるので、来年度の目標設定を変えてみてはどうか。また、コロナ化によって、運動が今まで通りできない場合もあるので、「体の動かし方等」の技術的な指導を行って欲しい。
	⑥基本的生活習慣（早寝・早起き・朝ごはん）の定着をめざし、保護者・児童・学校が同じ方向性をもってメディアの適切な利用の意識を向上させる取組を行う。	・「メディアコントロール週間では、家族と決めた自分のめあてを守ろうとしている」という回答が85%以上である。（児童アンケート） ・「メディアコントロール週間に、メディア利用のめあてを一緒に考えたり、声を掛けたりしている。」という回答が80%以上である。（保護者アンケート） ・「担任の先生は、メディアコントロール週間に、メディア利用や睡眠時間について話題にしたり、児童がめあてを守れるように声掛けしたりしている。」という回答が80%以上である。（教職員アンケート）	児童：　87% 保護者：　76% 教職員：　93%	B	・自ら決めためあてという意識を大切にし、継続して取り組んでいく。 ・保護者からは利用時間を選択制にしたことで取組やすくなったという言葉を聞く半面、厳しくなって困ったとの意見もあったので、「〇〇を△分」等子どもと話し合いやすい方法を保健だよりで紹介していく。 ・教職員は100%になるよう、元気プロジェクトの職員が中心になって他職員へ声を掛けていく。	児童：　88% 保護者：　77% 教職員：100%	B	・メディアコントロール週間では9割近くの児童がめあてをもって取り組んでいる。昨年度は比較的自由なめあてであったが、今年度は例示されためあてから選び、意識が高まるようにした上での達成状況としては頑張っている。例年のような保健委員会の児童によるミニ指導ができにくい状況であったが、代わりにメディアコントロール週間の間、毎日給食時に放送をするようにした。その際、保健委員会の児童が自分のめあても放送するようにしたことで、聞いている児童も自分のこととして考えることができたように思う。今後も児童間で意識が高まるような取組を続けていく。放送後すぐ担任も話題に取り上げるようにして、より意識が高まるようにする。 ・保護者および家族の協力が大切なので、メディアコントロール週間に入る前日には記録用紙を配付するとともに家庭へメール配信を行うようにする。家族で話し合うことで、保護者の意識を高めていく。 ・今年度はSNS等による被害について児童が認識できるような取組ができなかったので、来年度は意識して取り組んでいく。	基本的な生活習慣の定着には、家庭との連携が不可欠である。メディアコントロールは、家庭間でも差が大きいことから、保護者の意識改善も必要である。コロナによりメディアの利用は増加しているので、メディアの良い点や悪い点をしっかりと児童に理解させ、例えば、児童のSNS被害に陥らないような指導を行う必要もある。メディアコントール週間において、例示されためあてを児童が選ぶことにより、達成状況が分かりやすくなった点は良い。児童の意識が高まる取組は今後も続けて欲しい。取組にも工夫がみられているので、A評価でもよい。
		・「早寝・早起きができるように声を掛けたり、環境を整えたりしている。」という回答が85%以上である。（保護者アンケート） ・「早寝・早起きをしている。」という回答が80%以上である。（児童アンケート）	保護者：　92% 児童：　81%	A	・生活リズムを大切にするために、早起きを働きかけながら、継続して取り組んでいく。	保護者：　90% 児童：　82%	A	・昨年度は保護者81%、児童78%であったので、基本的生活習慣の大切さについて意識が高まっている。引き続き、保健だより・学年だよりで保護者に呼び掛けたり、担任による学級指導を折りに触れて依頼することで現在の意識が持続できるようにする。	早寝・早起き・朝ごはんは、家庭での取組であるので、家庭がどれだけ意識しているのかという点も重要であり、各家庭がどのように改善できるのかをこれからも考える必要がある。児童に目的をしっかりと伝え理解させることを保護者、学校が言い続けることも重要である。保護者・学校だけでなく、「児童」にも同じ方向性をもってと記述することで、児童への自主性を高めることを意識できたのではないか。
四　地域連携プロジェクト （開かれた学校づくり）	⑦各種通信やホームページ等を通して学校行事の様子や子育てに役立つ情報を発信し、本校の教育活動を多くの人に知らせる。	・「学校は、参観日、各種たより、ホームページ等で児童の様子や教育活動を知らせている」という回答が85%以上である。（保護者アンケート） ・「学校のホームページや学校から配付する校長室便り、学年便り、保健便り、PTA便り等の情報は役立っている」という回答が、85%以上である。（保護者アンケート） ・「先生は、連絡帳、電話連絡、学年便り、ホームページ等の各種通信により、保護者との連絡を密に取ったり、役立つ情報を発信したりできた」という回答が90%以上である。（教職員アンケート）	保護者：　93% 保護者：　93% 教職員：100%	A	・継続して取り組んでいく。 ・制限された行事の中で、コロナ禍においての学校での取組を多くの地域の方々に伝える手段として、各種通信やホームページ等、積極的な発信ができた。2学期以降も継続して情報を発信していきたい。	保護者：　93% 保護者：　93% 教職員：　92%	A	・継続して取り組んでいく。	各種通信やホームページでの提示は安定的に行っていることから自己評価は妥当である。特に今年度はコロナによって参観日がない分、「お知らせ」によって学校の様子が保護者に伝わり、学校への信頼関係を構築できている。校長だよりは読みやすく、山手小の様々な通信に対して保護者は満足している。一方で、ホームページでの情報公開は便利なようで取り扱いが難しいので、児童の個人情報等のリスク管理をしっかりと意識して欲しい。PTAという意識を持ち、学校・保護者・地域のつながりをより強くしていきたい。
	⑧学校・家庭・地域で連携して児童の健やかな成長を目指すために、ボランティアによる学習支援の機会を増やし、交流を深める。 **〔総社を愛する子供〕**	・「先生は、学習効果や地域交流を意識して、学校支援ボランティアの有効な活用に努めた」という回答が80%以上である。（教員アンケート） ・「地域ボランティアの方が、学校へ来て学習を支援してくださっていることは、子どもたちのために役立っていると思う。」（学習面、人との接し方等）（保護者アンケート） ・「わたしは、ボランティアの方と一緒に学習することが楽しい。（児童アンケート）	教職員：　61% 保護者：　93% 児童：　90%	B	・コロナウィルスの影響で、ボランティアの活動が制限されているが、可能な範囲で継続して取り組んでいく。 ・1学期は3年生で桃の収穫体験を行い、ボランティアの方に支援していただいた。 ・奉仕作業や児童の下校見守りなど、コロナに対しての学校対応に適した形でボランティアを募ることができた。今後もコーディネーターと連携し、社会の情勢に合った形で、学校と地域と家庭をつなげていく必要がある。	教職員：　71% 保護者：　94% 児童：　89%	B	・コロナウイルス感染症拡大防止対応に即して、ボランティアの活動を見直し、可能な範囲で継続して取り組んでいく。	自己評価・改善方法ともに妥当である。今年度は、コロナによってボランティアによる学校支援が少ない状況や家庭・地域との連携が今までよりも難しい側面があったと思うが、その時できる支援もあると思うので、学校からの「困り感」等を保護者や地域に共有して欲しい。ボランティアによる学校支援により子ども達は多くのことが学べていることから、ボランティアと児童の交流については引き続き行って欲しい。例えば、地域の人と連携して通学路のごみ拾い等を定期的に行うことで学校外での「掃除」の意識も醸成できるのではないか。 学校における教育課題を的確に捉え前向きに取り組んでいる教職員の姿勢は評価に値し、家庭や地域からの教職員への信頼は増している。コロナ時のように学校が困難な課題を抱えている際に、教職員の負担が少しでも減るように、学校の無理のない範囲で効率化してもいいのではないだろうか。